

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

嫌なもの。

猛暑と雨と砂嵐。

こう書いてみて気がついた。どれも天気に関することだ。恐竜の発掘はテント暮らしをしながら行われるので天気の影響をもろに受ける。とにかくこの三つは嫌だ。

それらの中で最も嫌なものは砂嵐である。恐竜調査は砂嵐の季節である春を避けて行われるが、夏でもそれは時々やってくる。たたきつける砂は体と荷物の隅々まで砂を侵入させ、メガネに傷をつけ、精密機器を破壊する。

調査期間の後半に入ると、太陽の紫外線に焼かれて劣化していたテントの生地は強風で裂け、テントポールは折れ曲がり、ジッパーは砂を噛んで締まらなくなる。「砂漠のホテル」であるテントが傷むと土気は一段と落ちる。疲れてくると修理も面倒になり、だんだんやつぱちになってくる。そうなると余計に危機的な状況に陥る。

とどめがテントが吹き飛ばされること。1994年の調査ではこのとどめを刺されて調査を予定より早く終了しウランバートルへ逃げ帰った。最近ではテントの性能もよくなり、ずいぶん快適になったが、それでも砂嵐は最悪

⑩ 猛暑と雨と砂嵐

だ。

次に嫌なものは猛暑である。これは想定内だが、それでも砂漠の日差しは体にこたえる。太陽を背にして歩くと当然自分の影法師が前を行くが、猛暑の時は光が私の体を透過して、影法師

発掘に嫌な三つのもの

師を消してしまうのではないかとさえ思う。地面からの照り返しもきつい。

こんな猛暑日は昼寝が大事だが、昼寝の場所としてテントの中は最悪である。化繊製のテント生地を熱線は透過し、空気の流れが悪い小さな空間は蒸し風呂と化すのだ。では木陰も岩陰もないところでどうするのか。唯一の天国は自動車の下である。昼食後、隊員たちはこの昼寝のパラダイスで眠りこける。

その点、雨は嫌であるが良いこともある。湿度でベタベタになるのは嫌だが、その一方で灼熱地獄の調査を休めるのだ。それにゴビの雨は優しい。「しとしと」という表現が合う。少なくとも「ざあざあ」や「じゃぶじゃぶ」ではない。雨の日は一日中テントに寝転んで、荷物の整理や調査のまとめをしたり、読書をしたりする。砂漠で読む文芸作品はまた味わい深いものだ。

しかし、本当にめったにないことで、私はまだ遭遇していないが、とんでもない豪雨が降ることがあるらしい。かつて、ある恐竜産地へ、そんな雨が降った年の翌年に調査に入ったことがある。その時は表面の浸食が進んでいて新たな化石がたくさん見つかった！めったにない豪雨は大変だが、こんないいこともたらしてくれる。

(岡山理科大教授)

車の下は昼寝のパラダイス。犬も昼寝にやってきた



● 随時掲載